

善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐる

第17回

D・H・ロレンス

『チャタレー夫人の恋人』の礼儀作法（上）

阿部公彦

Abe Masahiko

小説の語り手は「いい人」なのだろうか。見ていると、多くの語り手はたいへん熱心かつマメで、聞き手に対して親切。頼まれてもいないのに、無償の贈与を行うかのように、愛の横溢とでも呼ぶべき態度をとっている。見るからに善意にあふれているのだ。しかし、語りは徹底的に「形」に縛られた行為でもある。だから善意もまた、「善意の形」を身にまとうことを求められる。そうするとそれは、単なる愛の横溢ではすまない、複雑な様相を呈することになる。

この連載でとりあげてきた題材では、いずれも語りと作法の関係が問題になっていた。言うまでもなくイギリス小説の源流のひとつは作法書にあったのであり、サミュエル・リチャードソンの『パミラ』などを代表例に、人生の振る舞い方を教えることは初期の小説の重要な任務とされていた。しかし、小説と作法書とが完全に重なったわけではない。作法の指南を目的にすることが多かったにせよ、小説はより自由な形式として、他

ならぬ作法そのものや、その土台にある考え方も観察・描写し、ときには批判の対象ともしていく。

こうした一連の作法への関心の背後には「善意の文化」があった。小説の語りはそこに敏感に反応したのである。善意の表出が人間関係の柱となると、語りにもさまざまなルールが適用される。それは一方では小説技法の洗練にも結びついたが、他方、抑圧的な装置としても働くことになる。善意は、縛りともなったのである。

これまでジェーン・オースティンの『高慢と偏見』やルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』を読むことで確認したのは、「善意の文化」の中でたいへん居心地の悪い思いをした人たちがいたということである。そうした居心地の悪さが「不機嫌」や「イライラ」につながり、独特な反応を生み出していた。善意の文化に居心地の悪い思いをするような感性にとっては、善意をめぐる決まり事への反発や当てこすりや裏切りこそが、表現行為の動機となる。語りは愛や善意の横溢どころか、悪意や皮肉や毒や、不機嫌やイライラの集積した危険な行為とさえなる。

とはいえ、こうした「悪意の文化」が実は「善意の文化」と表裏一体であることは忘れてはならないだろう。『チェスタフィールド卿の手紙』にも如実に表れていたように、「善意」と「悪意」の境目は紙一重なのである。その紙一重のすぐ向こう側に、愛にあふれた、あるいは毒に満ちた世界が広がっている。

今回とりあげる D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』は、小説語りと作法の葛藤が極点にまで達した作品とも見える。何しろ、そこには「憎む」(hate)という言葉があふれて

いる。まるで他の感情表現の言葉を知らないかのように、人物たちは **hate** という表現を頻用する。彼らが憎む対象は決して一様ではないのだが、大きな争点となっているのが「上流社会」(**polite society**) であるのは間違いない。**polite** という語が象徴的に示すように、上流社会では作法の拠り所とされるような洗練された「善意の文化」が守られているはずなのである。ロレンスはそれを明確なターゲットとして、善意の仮面を粉砕しようとしている。**hate** という行為はその最大の武器なのである。

しかし、それではこの小説で繰り広げられるのが純然たる「憎しみの語り」なのかというと、事はそう単純ではなさそうである。たしかに『チャタレー夫人の恋人』は、小説作法から自由になろうとする小説家の態度をあからさまに示した作品とも見えるが、たとえ小説というジャンルから解放されたとしても、語りという行為がその根本に抱えた拘束から自由になるのはそう簡単ではないのである。¹

『チャタレー夫人の恋人』を語るのは誰か

『チャタレー夫人の恋人』はその骨格だけを見ると、意外とふつうの小説である。戦争の怪我が元で若くして不能になったチャタレー卿は妻を性的に満足させることができない。元々上流階級の人々が、上品な仮面の裏側で性的に放縱な生活を送り

¹ ロレンス研究の近年の動向については、武藤浩史『『チャタレー夫人の恋人』と身体知』に便利な概観がある(26-41)。武藤はロレンスの示したファシズム的な傾向に目を向ける必要は確認しつつも、これまでの批評で十分に注目されてこなかったロレンス特有の身体感覚に注意を向けることも大事だとしている。

がちであることは知られているが、家長の不能という事情もあって、チャタレー家には性的な奔放さを許容する空気が漂っている。そして案の定というべきか、妻のコンスタンスは婚外交渉の世界に足を踏み入れていく。やがて彼女が夢中になる相手が庭師のメラーズだったのは夫としてみると「想定外」だったかもしれないが、物語としてはそれほど奇想天外なものとはいえない。サンダーズも指摘するようにフロベールの『ボヴァリー夫人』をはじめとして、このような「不倫に走るブルジョア婦人」という人物像は19世紀の文学作品ではおなじみのものとも言える(182)。

しかし、そのような一見ふつうの題材を元にした『チャタレー夫人の恋人』には、いくつかの点で尋常ならざるところがあった。第一は言うまでもなくその性表現の露骨さである。作品が日の目を見るまでに長い道のりを辿ったのもそのためである。何しろはじめは、書き上げた作品を清書してもらおうことさえできなかった。ロレンスがタイプによる清書を依頼したフィレンツェ在住の女性作家は、第5章まで仕上げたところで先に進むことを拒否した。ようやく別のタイピストを手配しても、こんどは出版がままならない。付き合いのあったロンドンのマーティン・セッカーやニューヨークのアルフレッド・クノプフといった出版社に原稿の写しを送ったものの、とても出版できる状況ではなさそうだった。何とかフィレンツェの古い印刷所を見つけて発注したものの、植字工が英語をまるで知らないことは諸刃の剣となった。ロレンスによると組み版の作業は酔っぱらいながら行われ、そのためにありとあらゆる誤植が生まれたという。ようやく修正版が出版されると早々に粗悪な海賊版も出回り、時をへて無修正版が出版されたときには、こんどは

英国、米国、オーストラリア、日本、インドなどで性表現をめぐって裁判が起こされた。何とも多難な道のりである。

ところでこの点とも関連するのだが、第二の点として見逃せないのが、ロレンスがこの作品にかなり明瞭なメッセージ性を持たせたことである。今回とくに注目したいのもそのあたりである。ロレンスは自ら『チャタレー夫人の恋人』について「(A propos of *Lady Chatterley's Lover*)」というエッセイを書き、その中で「私はこの小説を誠実で健康的な、今日の我々にとって必要な本として出版したのである」と強調したうえで、この作品を通して何をやりたかったかをはっきり提示している。

この本で一番大事なことは次のことだ。私が世の男たち女たちに望むのは、性についてあますところなく、完全に、誠実に、堂々と考えることなのだ。たとえほんとうに自分の満足のいくような形で性を行為として全うできないとしても、少なくとも性を考えるにあたっては完全に堂々とやってほしい。(308)

小説家がこれほど明瞭に、しかも声高に、小説のテーマを言葉にするということ自体かなり注目値するが、こうしたエッセイの書きぶりに見合うだけのメッセージ性は、たしかに作品中にも確認できる。しかもそのメッセージの発信は、従来の小説的常識のようなものを覆すほどの、かなり過激な方法をとって行われているのである。

その方法とは「声」にかかわるものである。この作品の大きな特徴として、ところどころで登場人物が長い「演説」をするということがある。中でも第十四章でメラーズがコニーに対し

て語る過去の女たちとの性関係の詳細は、この作品の大きな山場をなすものと言えるだろう。しかし、このように明白な発話の形をとっていない、つまりやや偽装された「声」の表出もあちこちで目につく。たとえば冒頭近く、まだ結婚する前のヒルダとコニーの姉妹が、男たちと性交渉を持ったときのことが書かれる箇所がある。性行為の前と後では男たちの態度がころっと変わることを、会話記号でくくられない「声」が語っている。

でも、男なんてそんなもの！ 感謝知らずの満足知らずで、体を許さないと許さないというので腹を立て、許せば何かほかの理由でまた腹を立てるのだ。いや、理由なんて一つもなく、男は知ることを知らない子供だから、何を手に入れても、女が何をしてやっても、満足できないということなのだ。(14)

But that is how men are! Ungrateful, and never satisfied. When you don't have them, they hate you because you won't. And when you do have them they hate you again, for some other reason. Or for no reason at all, except that they are discontented children, and can't be satisfied whatever they get, let a woman do what she may. (9)

この一節がヒルダやコニーの心境を代弁したものであることはたしかだが、では、この一節を実際に語っているのは誰か？ というと判然としなくなってくる。彼女たちが発話として語ったものではなさそうだし、心理描写とも言いきれない。まるで語り手が脇から加勢し、人物たちが口にしていない、それどころか心の中でも意識していないことまで代弁してくれていると

も見える。語り手が先走りしてヒルダやコニーに考えを押しつけようとしているのか。あるいはあえて彼女たちの心理から遊離したことを口走ることアイロニーを生み出すというもくろみなのか。

ウェイン・ブースも指摘するように、『チャタレー夫人の恋人』では語り手と登場人物の間の境目がかなり曖昧化されている。² 地の文の語りと登場人物の発話とを区別することは長らく小説作法の常識となっており、地の文で人物たちの心境や発言を描く場合にも、それが誰に属する心境や声なのかは明示されてきた。『高慢と偏見』のような作品でも、語り手が媒介する形で人物たちの内面を自由間接話法的に伝える箇所は見られるが、それでも声の所属はほぼ明瞭に示されている。

これに対し『チャタレー夫人の恋人』では誰がそれを言っているのか、誰がそれを考えているのかの区別があまりされない。言葉の出所について、無頓着なのである。上に引用したのもその典型的な例だ。しかも、小説を読み進めてわかってくるが——これはある意味では驚きでさえあるのだが——語り手によるこうした介入が決して「特別なこと」として行われているわけではなさそうなのだ。『チャタレー夫人の恋人』の世界では、誰のものとも判然としない声が語るのがごく当たり前のことになっている。だから、ずれや乖離や疑いの意識もほとんど

伴っていない。³

そんなことが可能になるのは、この小説の中で、言葉をめぐるある常識が働いているからだと思われる。それは、言葉が表向き意味するままのことを意味する、ということである。別の言い方をすると、語られた言葉が別の意味やニュアンスを持ってしまふかもしれないという不安や疑念があまり生じていない。だからこそ、声の出所が不明でも大丈夫なのである。声の主が曖昧になると、言葉の意味の地盤は揺らぐ。所有者がわからなければ発言の裏にある意図や態度もはっきりせず、言葉がほんとうのところ何を意味しようとしているのかがわからなくなるからである。しかし、『チャタレー夫人の恋人』では、そうしたずれや逸脱に注意を向けることは期待されていないように思える。本人による自作擁護のエッセイ「『チャタレー夫人の恋人』について」にもよく表れているように、ロレンスは堂々と作品の外でテーマやメッセージを語るができる人である。サンダースの言葉を借りれば、「ロレンスの諸作品の中でも、この小説ほど語り手の意識が支配し、また浸透しているものはない」(181)。そういう意味では天真爛漫なほどに、あるいはほとんど無神経なほどに、言葉の一義的な意味に対する信頼がある。少なくともそう見える。しかし、時代はすでに20世紀のはじめである。そのようなことがありうるのだろうか。

² もともとブースは『小説のレトリック』(81)の中では、いわゆる「含意された作者」(implied author)があちこちに顔を覗かせるこのようなロレンスの書き方を稚拙さの表れとみなしていたが、後にやや肯定的な見方をするようになった。

³ この荒っぽさは我々が慣れ親しんだ小説の約束事に対する「平手打ち」だとジョージ・レヴィンは形容している(... the whole narrative strategy of the novel seems an almost deliberate slap at our conventions of reading. [235])。

〈文 献〉

*『チャタレー夫人の恋人』および「『チャタレー夫人の恋人』について」からの引用は D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*. Ed. by Michael Squires (Cambridge, UK: Cambridge U.P., 1993) に基づいている。前者については武藤浩史訳『チャタレー夫人の恋人』(ちくま文庫 2004) の該当箇所も併記し、後者については拙訳のみを載せた。その他の引用は以下のとおり。

Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Ed. by Pat Rogers (Cambridge: Cambridge U. P., 2009)

Booth, Wayne C. “Confessions of a Lukewarm Lawrentian,” in *The Challenge of D.H. Lawrence*. Ed. by Michael Squires and Keith Cushman (Madison: U. of Wisconsin P., 1990), 9–27.

———. *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: U. of Chicago P., 1961)

Elias, Norbert. *Civilizing Process: The History of Manners*. Trans. by Edmund Jephcott (Oxford: Blackwell, 1978)

Kinsey, Alfred C., Wardell B. Pomeroy, Clyde E. Martin. *Sexual Behaviour in the Human Male* (Bloomington, IN: Indiana U.P., 1975/1948)

Levine, George. “Lady Chatterley’s Lover,” in *D.H. Lawrence*. Ed. by Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986), 233–37.

Petersen, James R. *The Century of Sex: Playboy’s History of the Sexual Revolution: 1900–1999*. Ed. with a Foreword by Hugh M. Hefner (New York: Grove P., 1999)

Sanders, Scott. *D.H. Lawrence: The World of the Major Novels* (New York: Viking P., 1974)

武藤浩史『『チャタレー夫人の恋人』と身体知——精読から生の動きの学びへ』(筑摩書房 2010)

(東京大学准教授)